

## 視察報告

## 富山インターネット市民塾の活動

大学と地域の連携～市民の学び合いの場としての ITC 茶論

中川啓子

## I. はじめに

富山インターネット市民塾（以下、市民塾）とは、地域をまるごとキャンパスと考え、誰もが「市民講師」となることができる、学びと交流の場である。参加者は特技や趣味など、自分の知識や技術を活かした講座を、インターネットを使って開講することができ、その講座を誰でもどこからでも受講することができる（平成27年度の講座数55講座、受講者906名<sup>1)</sup>）。

いわゆるeラーニングと呼ばれるものであるが、「受講生」と「講師」が固定されることはなく、参加者が教える側にも学ぶ側にもなることができる「学び合い」の場となることが大きな特徴の一つであり、「知のフリーマーケット<sup>2)</sup>」と表現される。2016年に19年目を迎えた。

講座はインターネット上だけではない。スクーリング、体験講座、まち歩きなどを通じて、地域活動や地域企業ともつながる仕組みとなっている。

今やインターネット市民塾は全国に広がっているが、発祥の地は富山県である。その研究開発と立ち上げに携わった柵富雄氏（富山インターネット市民塾推進協議会副理事長）の元を2016年9月21日～22日にかけて訪問し、富山大学の中で実施されている市民塾の活動のひとつを実際に見せていただく機会を得た。

## II. 学びの境界線が無い「めだかの学校方式」

今回見学した「ICT茶論（サロン）」は、タブレットをはじめとするICT機器の使い方や活用法を学び相談する場である。会場（富山大学人間発達科学部多目的室）にはタブレット機器等を持参したシニア世代の受講生9名、サポートを行う特定非営利法人地

域学習プラットフォーム研究会<sup>3)</sup>の理事長でもある柵富雄氏と事務局員の柵二三子氏、大学での事務局担当者1名、そして富山大学の学生1名の、合計10名強が集まっていた。この学生は、ICT茶論などを論文テーマとしているとのことだった。多い時は4名の学生が参加し、サポートにあたっている。

月に2回の開催で、基本のスタイルは参加者同士が教え合い学び合う方式だ。2016年度からは「講座（講師による勉強会）」と「なんでも相談室」の二本立てとなったそうで、今回は「なんでも相談室」の開催日であった。

参加者はタブレットを使って自分が撮影してきた動画を再生して他の参加者に見せたり、スマートフォンの機能で分からないことを相談したりする。自宅のパソコンを持ち込んで不具合を見てもらっている人もいた。困ったことや聞きたいことの持寄り会といったところだ。

学生や事務局も、話を聞いたり一緒に調べたりするが、先生役をするわけではない。参加者同士で、誰かができないことは、別のできる人が教えてあげている。あるいは、ああでもないこうでもないという数人で悩んでみる。自分が新しく会得したスキルを他の人に見てもらおう。時には休憩しておしゃべりに話を咲かせる。

人がやっていることをのぞいたり、人に見てもらおうことで、気付きや学びがあるという。

ICT機器を手にしても、難しい顔をしている参加者は一人もいない。6年目のベテランからまだ1年少しの新人まで、参加者は幅広いが、それぞれのペースで進めておられた。

ICT茶論は「めだかの学校」と呼ばれている。

その意味するところは、講座の冒頭に全員で合唱する童謡「めだかの学校」の替え歌の歌詞「だれが生徒か先生か<sup>4)</sup>」という一文にあるだろう。誰もが生徒であり先生である。学びの境界線を作らないICT茶



写真 ICT 茶論は合唱でスタート（中央女性が伴奏役）

論の姿が簡潔に表されていた。

このやり方が最初からうまくいっていたわけではないであろうし、今の雰囲気ができあがるまで苦勞・工夫も多々あったと思われる。

しかし参加者ひとりひとりが最後に「今日の学び（やってみたことや新たに知ったことなど）」について生き生きと発表する様子からは、皆それぞれに役割を持ち、この場が大切な居場所となっていることが伝わってきた。

### Ⅲ. インターネット市民塾の広がり

富山での実証実験からスタートしたインターネット市民塾は、その後全国に広がっている。和歌山、東京（世田谷）、熊本、広島（尾道）、神奈川など各地でそれぞれの地域特性などを活かしたスタイルとカリキュラムで、インターネット市民塾は現在も進化している。

柵氏が理事長を務める地域学習プラットフォーム研究会では、それらの各インターネット市民塾をネットワークし、多彩な人材をつないでいくことで地域人材活性化のプラットフォームづくりに取り組んでおり、

各市民塾の拠点都市を会場にした市民塾サミットも過去に6回開催している。

インターネット市民塾は、個々が自分の持ち味を生かして社会とつながり、地域で活躍するきっかけとなる有用なツールといえるだろう。

### Ⅳ. おわりに

ICT 茶論では、「教えること」と「学ぶこと」がバランスよく合わさることで生まれる気づきや学びが、参加者の成長につながっていると感じた。本家であるインターネット市民塾のミニマムな現場を見せてもらったようなものである。

教え学び合うことの意味と必要性、ICT を活用した人と社会とのつながり創出への多様なあり方と可能性を、今回の視察で改めて確認することができた。

学ぶことには終わりが無い。

学びの現場である大学においても、地域や企業など学外との連携によって、新しい学びの形を模索し、見出していければと思う。

### 謝辞

今回の視察見学を快く受け入れてくださった柵富雄氏、柵二三子氏、ICT 茶論参加者の皆様、富山大学の関係者の皆様には、厚く御礼申し上げます。

### 注

- 1) 富山インターネット市民塾推進協議会 平成 27 年度事業報告（2016. 3. 31）
- 2) 富山インターネット市民塾 HP  
<http://toyama.shiminjuku.com>
- 3) インターネット市民塾等を通じて ICT を活用した新しい教育モデルと地域学習プラットフォームの研究開発事業を実施し、インターネット市民塾立ち上げ支援を通じて人づくり・地域づくりを行っている。
- 4) 富山市シニア情報サポーター会 ふるさと元気唱歌